

石川則夫提出 学位申請論文

『文学言語の探究―記述行為論序説―』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文が主軸とするのは文学の〈言語活動〉分析であるが、文学作品の〈言語活動〉分析だけではなく、分析する側の〈言語活動〉、つまり研究者自身の文体はどうあるべきかということを見定めることに目標がある。研究対象としての文学は、その作品に関わる言葉の総体として存在しているように見えながら、実はそれを迎え撃とうとする言葉と共に生起する言語的實在に他ならない。そして、それが研究者の言葉として外化される時、つまり、文章として定着された時、事後的に、その文章において文学作品の形が顕在化しなければならぬとし、研究

者すなわち記述する主体の書く行為において文学の可能性を見出すことを探究するものである。したがって、文学という領域における言語認識論の探究と、その実践としての作品研究を提案している。本論文は、

I 章 文学言語論の定位と展開

II 章 小林秀雄・批評の言語をめぐる

III 章 川端康成・生動する文学言語

IV 章 記述行為の身体性へ

という四章で構成されている。

I 章では、文学研究への言語論的接近には意味論を含みこんだ上での言語論が要請されることを論じ、F・D・ソシユール『一般言語学講義』に代表される言語観、すなわちオーラルコミュニケーションを理想化することによって得られる言語財としてのラングの措定が、言語道具観にもとづく文学論を導出してしまうのに対して、時枝誠記の「言語過程説」がとらえる、表現過程すなわち理解過程

という行為論上における言語認識を基盤として展開すべき文学論を考察している。また、現代文学理論の上に展開された言語論、記号論が提出する文学像、いわゆる「テキスト論」が開いて見せた、作品と読者の間に関係論的に生起する（読み）としての文学という概念の成立事情を再検討した上で、「意味」についての考察を避けてきた言語論への批判する言語哲学者丸山圭三郎の言語認識モデルを考察している。そして、コミュニケーション行為モデルを文学認識論の地平へ導入することの批判検討を通して、意味生成の力学をへ非任意性」という概念で提出し、これによって文学認識論の基底を構築しようと試みている。また、近現代文学研究の方法論において研究言説自体を問題化する先行論を踏まえ、文学研究の前提としての読書行為を、受動的なものではなく、多用な読みの生産性を秘めた行為でありながら、それに対する研究行為が対象の客観的な分析記述を目的とするためにメタ言説構成の方向性を持たざるを得なかった研究状況を批判している。その上で、研究者の文体が研究自体を方向付けている実態を論じ、研究言説の実際

においては読みの多様性を文体として導入しながら進められてきていることを川端康成「心中」研究史に即して論じている。

Ⅱ章では、小林秀雄の批評における言語論的方法を検討している。小林の初期批評理論において、当時、広く読まれていた近代フランスの哲学者H・ベルクソンの認識論を文学の批評理論として積極的に読み換えたと思われる箇所を分析し、特にベルクソンの「形而上学入門」における動体に関する認識の方法が小林のテクストの深層にうかがわれる点を考察している。他方、小林秀雄の批評の自立について、それを「Xへの手紙」において認定しようとする先行諸論に対し、批評理論の成熟の過程を、また小林の小説創作の実際に即して徐々に批評文体が獲得されていく様相を、「Xへの手紙」までの創作に即して考察している。更に、小林秀雄の批評の身体性について、刺激と影響を与えたと考えられる二人の人物、青山二郎からは骨董、陶器への眼を、深田久弥からは登山を通しての山の見方を学び、美についての経験とその自己同一化の過程をいかにして獲得するに至った

のかを検討し、『本居宣長』にみられる対象同化の方法についての示唆がこの二人に対する敬愛の姿勢において表れている点を指摘している。そして、戦後の小林においては、未完のまま終了した『感想』―ベルクソン論と本居宣長への言及が同時並行的に記述された形跡が見られることを、昭和三十五年における小林の記述を取り上げて指摘し、「ベルクソン」論と本居宣長に関する記述の双方に通底する批評的テーマがあることを見出しつつ、「本居宣長」論への動機がこの昭和三十五年前後に形成されていた可能性を論じている。また、青山二郎から手ほどきを受けて古陶磁を自ら購入し始めた時期が未確定だった現状に対して、関連資料の調査分析から昭和十三年の秋と推定できるといふ結論を得、この経験を通して、戦中の「無常といふ事」の前後の記述文体の変化を分析し、文体的特質としての〈形姿〉という概念、用語が戦中・戦後にかけて頻出してくることを調査、それがいかに獲得されたのかを考察している。

Ⅲ章は、川端文学における言語観の固有性を分析するという視点から、特に顕

著なこととして比喩表現の多用に注目し、新感覚派以来の表現技巧としての直喩表現にしぼって、意識的に比喩表現に依存していこうとする言語認識の傾向を論じている。「伊豆の踊子」研究においては大正七年の伊豆旅行が実体験として特権的な位置を与えられているが、その実態を調査し、従来未踏査であった「山越えの間道」を旅の行程に精密に位置づけ、「伊豆の踊子」の虚構性を問題化し、従来の研究によって実体視されてきてしまった「一高生Ⅱ私」の人物像をそのまま作家川端康成自身に重ね合わせる読みを批判することから、川端作品に通底する物語に抗うような言葉の動きを析出しようとしている。また、「伊豆の踊子」が一人称回想小説として書き出されている限り、必然的に語る私Ⅱ語り手と、語られる私Ⅱ作中人物としての私との分離が導出されるが、従来の研究は後者に一貫した人物造形を想定しつつ、作家川端と重ね合わせた読解を提出してきた。しかし、作中の私に関する記述を精密に点検することによって、必ずしも語り手と登場人物としての私、という二分法は整ってはおらず、作中の私の見出した出来

事から逆に語り手が影響される点もあることを考察し、物語的構成を裏切って表現される言葉の詩的機能に注目する論点を提出している。さらに、「伊豆の踊子」の前後に書かれる「掌の小説」群の表現的特質を分析し、先行諸論において登場人物論、主人公論という人物中心の物語性の読解が展開されてきたのに対して、登場人物への本文のあり方は、作中の誰を特権化するでもない反物語的な語り方をしている点を分析し、これらの「掌の小説」群にこそ川端文学の特質が見出せるとしている。そして、これらの表現の特質が、戦前から戦後にかけて生成していく「雪国」に結実していく有り様を作品研究として考察している。

IV章は、これまで論じてきた文学研究理論、読書行為論において提案した記述行為の分析と言語表現の身体レベルでの発動という視点から、宮澤賢治、折口信夫、堀辰雄、夏目漱石の作品分析を通して、作品中に現れる身体性、記述行為を洗い出し、そこを論点として各作品表現の読み直しが試みられている。宮澤賢治作品の多くは作品内にファンタスティックな面とシリアスな面との両義的な要素

を持っていると指摘、『雪わたり』を例として近年の研究が、本作品に童話、児童文学のジャンルには納まりきれないある種の不気味さを指摘しつつも、その根拠を追求するにまだ十分ではなかったと論じ、作品に登場する狐たちにまつわる伝統的な感性を押さえたうえで、狐と人間の二項対立世界を止揚する、歌うという身体表現のシンクロ機構について考察している。折口信夫の創作小説としての『死者の書』は近現代小説としては不遇な作品であり、発表当時、堀辰雄以外には評価する読者もないままであったが、近年は折口信夫の全体像を検討しようとする傾向もあり、小説としての評価が期待されている。本論では、歴史の転換期を描くこの小説に、伝承的な口頭言語から書字言語への移行期にあった人物たちの、その思想のありかたを描いているという視点から論じている。堀辰雄「不器用な天使」は近代フランス文学、特にJ・コクトー「大股びらき」からの影響関係を指摘されてきたが、本文における現在終止形の文末表現の効果と、心理描写との密接な関係に注目し、「した」で終止する文末表現との差異を分析すること

によって時間叙述の特殊性を考察している。そして、夏目漱石「こころ」論では、先行研究において「先生」と語り手「私」の葛藤的關係をいかに整理し得るかというところが争点となつて久しいが、本論では、「先生」の長大な「手紙」に対して「私」の手記がいかに交錯しているかに論点を据えている。すなわち、「私」の書いたことと書こうとしたことに大きな懸隔が横たわっていること、つまり、「私」の書いたこと（手記）と「先生と私」・「両親と私」において、「先生」について書くことと知るのと、語ることと語り、聞く回路的コミュニケーションという二つの指向性が混在する有り様を分析考察し、語ることへの指向性が「私」の手記の当初の目的とは異なる方向へ引きずってしまい、結果として読者を「先生」の手紙の宛先人（「私」）の立場へ重ね合わせる事になってしまった、すなわち「先生と遺書」の章が引用で終わる理由であると結論している。

論文審査の結果の要旨

学位申請論文『文学言語の探究―記述行為論序説―』は、文学における言語行為の分析に主眼を置き、特に「読むこと」、「書くこと」とはどのような行為であり、そこでの認識の特異な様態をいかに記述していくかという課題の中に文学研究を新たに位置づけようと試みたものである。本論文が主軸とするのは文学の「言語活動」分析であるが、問題は、その分析する側の「言語活動」、つまり研究文体はどうあるべきかと見定めることに目標がある。対象としての言葉の総体としての文学は、それを迎え撃とうとする言葉と共に生起するものだが、それらの言葉が外化される時、つまり、文章として定着された時、事後的に、その文章において文学作品の形が顕在化しなければならぬとし、その記述行為において文学の可能性を見出そうとしている。そのために文学という領域における言語認識論の探究と、その実践としての作品研究を提案するものである。

I章の原理論は、作品とは何か、作品を読むとは如何なる行為を言うかという、近年の日本近代文学研究において繰り返し言及されてきた研究方法や、そのあり方についての言説を整理し、論者の主張を展開しようとするものである。「文学産出」「文学作品」「文学受容」の三者の関係はコミュニケーションの関係であり、そこに規則性、構造を明示できる体系を構築しようとするS・J・シュミットの理論に賛意を表しつつ、ソシユールの「言の循環」や時枝の言語過程説の言語論に立ち返り、そこから伝達の意味や研究言説の開発に論を展開しているところは、とかく、理論抜きに文学作品を論じ自己完結的に作品を読み果せようとする多くの研究者への苛立ち、即ち、解説的、説明的に流れようとする研究言説のメタ言語化（メタ物語生産）への批判となっており、そうではない読みの行為、記述行為の可能性を模索しようとする実験的な試みがI章の大きな特質となっている。

II章の小林秀雄は、ベルクソン体験、意識とことば―「Xへの手紙」まで、青山二郎と深田久弥、宣長論、「形姿」という文体、の五節に内容は分かれるが、

論者は評論と小説とを、読むという行為において敢えて区別していない。しかし、小説を書いている小林に注目してこのことを次のように論じている。最後の小説「Xへの手紙」(昭7)は「絶対言語」をもたらすべき未知の対象Xへの欲望を定着したものであるが、小説がいつしか評論の形をとり出すところに評論の発見があり、評論への道が開かれて行くというものである。以下、美神と宿命をキーワードにしてその軌跡が論じられているが、宣長論への新しい切り口として〈形〉〈姿〉という視点を出して注目される。その背景に骨董体験を見ている。

論者の読みの記述行為が遺憾なく發揮されているのは川端作品を扱ったⅢ章である。既にⅠ章で「心中」が取り上げられていたが、Ⅲ章では「雪国」「掌の小説」群についての注目すべき論考のほかに、「伊豆の踊子」について多くの言及がある。湯ヶ島、下田街道という場所と風景に特別の意味のあることを作家の記憶に立ち返って検証している所も注目される。即ち大正七年秋の旅以来、「南伊豆行」(大15)で峠を乗合自動車で越えたことで、旧来の旅では見えなかった明

るい海と大島が視界に入り、それが五章冒頭に挿入されたというものである。そして、それは「湯ヶ島の思ひ出」に見出された新たなへ時ではなかったかとしている。

文学作品の新しい読みの可能性を可能な限り拓こうと、読者を限りなく挑発し続ける未曾有とも評すべき論考であり、本論文の提出者石川則夫は、博士(文学)の学位を授与される資格を十二分に備えているものと認められる。

平成二十二年七月十四日

主査	國學院大學教授	傳馬義澄	印
副査	國學院大學教授	上田正行	印
副査	國學院大學大学院客員教授	池内輝雄	印
副査	都留文科大學教授	田中実	印